早道町の飛脚

江戸時代（1603―1867）、足軽は、軍事関係の活動に従事していない時は、しばしば武家屋敷の巡回や門番といった公務に従事しました。加賀藩（金沢を中心とする封建時代の石川）では時に運搬業者として雇われており、種々の手紙、公文書、送金為替、小荷物を、東の江戸(現在の東京）や西の大阪・京都に運んでいきました。このような宅配業務に携わった者たちは「飛脚」と呼ばれました。多くの足軽がこの仕事に就きました。高西家や清水家がかつてあった旧早道町は、「飛脚」業務に従事する足軽たちが居住する地区でした。

飛脚はそのスピードと独特の走行スタイルで知られました。彼らは普段から脚を鍛えており、指示を受けたらすぐに城に駆け付けました。熟練の飛脚であれば、金沢から江戸までの距離を、夏季にはわずか５日間、冬季には６日間で駆け抜けたと言われています。飛脚が予定期間よりも早く物品を届けた場合、彼らは気前の良い報償に与ることもありました。しかし遅刻した場合には、しばしば運賃を減額されました。飛脚の配達には街道を利用しましたが、問題が発生し得る他藩の領域を回避するため、彼らは脇道や山道にも精通していました。

しかし 17 世紀後半の５代目藩主・前田綱紀（1643－1724）の時代、飛脚業務は足軽から次第に民間に委託されるようになりました。